

私の履歴書

釜本 邦茂

②

留されて翻意した。ドイツの名将バイスバイラーと強い絆で結ばれた二宮さんは理論と情熱を併せ持つ、三菱の黄金時代を築いた監督だった。

となった。2試合ともアウェーで戦ったのは複雑な中東情勢を反映したものであった。

92年に欧州連盟(UFA)に加盟するまでイスラエルは欧州、オセアニアなどその都度、異なる大陸で予選を戦っていた。70年代はアジアを主

がつけば最後の生き残りになっていた。東京五輪の前から始まった少数の精鋭に集中的に投資する強化策はメキシコで銅メダルという花を咲かせたが、次を育てる余力を奪ったのだらう。そのツケを払い続けた70年代だった。

1974年から3年連続で日本リーグ(JSL)の得点王になった。75年はアシスト王も。年齢でいうと28歳から32歳にかけてサッカーがさらに面白くなりだした。点を取ることにゲームのつくり方に考えが広がり、第二のピークが来た感じだった。

「最後の踏み込みを小さくしたらどう」と提案された。馬力の衰えに合わせフォームをよりコンパクトにしたらシュートがまた入るようになった。74年10月20日の三菱重工

とも五分の試合ができ、大会

33歳で代表引退。衰えを感じたわけではないが、私の存在が新旧交代を遅らせる気もした。9月に王様ペレが引退興行の一環としてニューヨーク・コスモスとともに来日、14日に国立競技場を6万人を超す観衆で満員にした。私の引退試合でもあった。後半、PKを失敗したのはご愛嬌。

日本代表引退

新旧交代 国立で奥寺見送る

続く予選敗退「潮時か」

オランダの「トールフトボール」が世界に衝撃を与えた74年ワールドカップ(W杯)西ドイツ大会。

日本代表は視察を兼ね現地で合宿をしたが、その時、テレビ解説の仕事で来ていた岡野俊一郎さんから貴重な助言を得た。

「若い頃のようにシュートが入らんです」と明かすと

私も区切りをつける気でした

が後任の二宮寛監督に強く慰

戦でJSL通算100得点を109試合目で達成。米国のプロチームから「家、車付きで月給2000ドル」という誘いを受けたのもこの頃だ。

日本代表は苦闘を続けた。76年モントリオール五輪予選は韓国とイスラエルの壁に阻まれ、長沼健監督と盟友森孝慈はここでチームを去った。

私はここでチームを去った。私は0-2で敗れた。4日後の再戦も落とし早々に予選敗退



代表での筆者(左)と奥寺康彦(右)

戦場としたが、セキュリティ上の問題で日本に入国できず、私らはホームのイスラエル戦を毎回韓国のソウルやテルアビブで戦った。これは結構な重荷だった。

この連敗は私にこころが潮時と思わせた。メキシコ五輪の仲間たちは次々に去り、気が

(日本サッカー協会顧問)